幼児の心理療法(三)

玉井収介

今回は次の問題として、プレイセラピーに必要な設備や玩具類について説明しよう。

まず**プレイルーム**であるが、個人療法の場合の広さは、二間に二間半ないしは三間ぐらいもあれば十分である。

設備としては水道と流し。これは是非必要で、幼児用に少し低目に設置する。

床は水を流す子どもがあるから、リノリュームか何か張る方がよい。しかし、これはすべるから木のままの方がよいという人もある。

備えつける品物としては、子ども用の机一つとイス二、三脚、それから玩具類を入れる戸棚、そうじ用具一式などである。

この程度が最低の設備であるから、たいしてむずかしいものではない。普通の幼稚園でも学校でも比較的せまい一室を改造すれば十分できる程度のものである。ただ、注意しなければならないのは、他の人が出入りしたり、のぞきみられたりするおそれのない静かなへやであることが必要で、この意味では、廊下からみられる学校の教室などはすこぶるまずいものである。

次にのべるようなことは、プレイルームとしての必須の条件ではなく、もしはじめからそれとして設計するならばという程度の希望条件であるが、わたくしたちの経験から感じていることをのべておこう。

壁の塗料　壁に絵具をぬりつけたりする子どもが必ずいるから、全部でないまでも、下から二、三尺は拭きとったり洗ったりできるものにしておきたい。

そうじ口　壁の一か所のすみにそうじ口をつくっておくと便利で

ある。

電灯　電灯はぶら下げるよりは天井にはめこむようにした方がいいであろう。何か投げつけたりすると危険だからである。

そのほか**マイクロフォン**をつけて録音できるようにするとか、**ワンウエイミラー**を通じて観察できるようにするとかいうこともできればそれにこしたことはない。

つぎに**玩具類**であるが、一応アクスラインがあげているものをしるしてみよう。

ドルファミリー、ドルハウスおよび家具、哺乳びん、玩具の兵隊、動物、ままごと、人形の着ものやそれを入れるバスケット、ゆび人形およびその舞台、フィンガーペイント、砂、水、てっぽう、自動車、飛行機、電話、粘土、用紙類、チェッカーなどである。

次にわれわれの経験による意見を加えてみよう。

ドルハウスは、二階建ぐらいの家をたてに切ったものと、平家の家を屋根だけ抜いたものと考えられるが、われわれは後者の方がいいように思う。大きさは、三尺四方までくらい、つまり子どもが容易に手がとどく大きさで、大体いくつかのへやにわかれている程度の細工で十分である。この程度の大きさだと家具はミニュチュアセット、ホームセットなどの名で市販されているものをいくつか買えばよく合う。人形は、この大きさにあわせれば身長一五――二〇センチぐらい。市販のものにはおじいさんおばあさんがいないからわれわれは針がねをシンにしたぬいぐるみをこしらえている。精巧である必要はないから、祖父母、両親、きょうだい、赤ちゃんの特徴の出たもの七コ――九コぐらいで一組にするとよい。

哺乳びん衣類などはファミリードルの大きさとは無関係に市販のミルクのみ人形のやや大型のものを使えばよい。動物は、ぬいぐるみのくま、さる、犬、ねこなどとともに、鉄砲のマトになる紙に描いて立てられるようなものがあるのがいいであろう。

クレヨン、フィンガーペイントには用紙がいる。クレヨンは洗えばおちるものが便利だし、よごれないようスモックもほしい。粘土には、板一枚およびヘラ数本、鉄砲はかわりにピストルや弓矢でもいいが、コルクのタマの出るものなどがいい。自動車、飛行機、汽車などは、あまり精巧な電気機関車は不向きで、木製のがん丈で単純なものか、押して走らせる程度のものが適している。ままごとやお茶セット、炊事用具などもあまりこったものでない方がよい。電話は是非二コ以上必要である。このほかあってもいいのは、太鼓程度の楽器、ゴムまり、なわとび、洗たく用乾ひも、フライングボール、つみ木、ベルノッカー、ゆりかごあるいはベットおよび毛布その他、黒板と色チョークなどである。ゲーム類は複雑なものはよくないが、チェッカーはわが国の子どもにはなじみが少ないので、われわれは斗球バンや輪投げを用いている。もちろんこれを全部備えよというのではなく、この中からえらびなさいという意味である。

一般に、避けるべきものの規準は、あまりに精巧で複雑なもの、こわれやすいもの、危険のあるもの、特殊な技術のいるものなどである。

わたくしがアメリカでみた多くのクリニクの中には、とくにプレイルームといって特別のへやはなく、治療者がその都度スーツケースか箱に入れてもちはこんでいるところもあった。つまりその程度の分量でよいのである。

ただ、こわれたものはあまりおかない方がいいし、ある程度の損耗はさけられないから適当に予備をもっていることが必要であろう。

最後に、付属的なものとして、そうじ用具、手ぬぐい、石けん、かみくずかご、黒板ふきなどがあり、部屋のドアにはさまたげられないよう使用中とでもいう札をかけておく方がいいであろう。

なお、親のトリートメントも同時におこなう場合はもう一へや必要になるが、これは、静かで、のぞかれたりしないという条件がみたされればどこでもよい。机一つ、イス二つ三つが最低の設備で、おちついて話せるよう、カーテン、花びんなどあれば申しぶんない。

〈例1　六才の児童〉

この例はさきに制限の話のところでのべた万年筆を折るといって石けんにつきたてたあの子である。

はじめにみたのは幼稚園にいるころであったが、いろいろな事情で実際治療に入ったのは小学校入学後であった。

おもな問題は、全く集団に参加できず、極端におちつきがないこと、吃り、幼児語、乱暴、サイレンや飛行機の音などをこわがる、などで精神薄弱をうたがわれていた。

ひとりっ子で両親の期待はつよく、とくに、いなかのこととて、近所に縁者が多く、同年のいとこがいて、それがおとなしい子なので祖母がそれと比較してとやかくいう。そのため、勝気な母親がよけいつよくこの子に干渉する、といった傾向がつよかった。

さて、治療をはじめたものの、母親からはなそうとすると真っ赤な顔になって、ものをなげる、つばをはきかける、かみつくといった大あばれをするので、一応変則ではあったが母親も一しょにプレイルームに入れることにした。

このような場合は、無理しても最初から離さないと、ますます離しにくくなるという考え方もあり、わたくし自身もこのように一しょに入れて徐々にはなそうとしたのは、このほかには一例しか経験がない。しかし、無理をしたために中断してしまうという場合もある。この例は一応は一しょに入れて成功した方といえよう。

さて、治療者と本人と母親と三人でプレイルームに入ると、いろいろなおもちゃにつぎつぎと手を出すが、一つもそれであそぶことができない。いわばひき出して投げちらかすだけといったありさま

である。

大体プレイルームには、たいていの子どもの家よりもたくさんおもちゃがあるから、どれからあそぼうかというのでつぎつぎとうつっていくことはよくみられる。とくにはじめの一、二回には少なくないが、この子の場合にはそれよりちらかして投げとばすことだけと感じられた。

母親は、何とかしてそれをおちつかせようとして、叱ったり、おだてたり、「ホラ、これおもしろいよ」と玩具を示したり、手をとってイスにかけさせようとしたり、手をつくすが、全く無効である。ところが母親が、「そんなにいうことときかないならかえってしまう」とドアから出かかると真っ赤になって泣きながらしがみつく。

みていると子どももおちつきがないことはたしかであるが、母親も、「おりこうさんだから」とおだてたかと思うと「おバカさん」といったり、「坐って」といってすぐひきつけたりといった具合で、ずいぶん矛盾したおちつきのないことをくりかえしていた。

治療者は、母親に、「かまわないから放っておいて下さい」と数回たのんだのみでそのままにしておいた。しかし、母親は放置しておいたらどんなことになるかわからないのに、とばかりおどし、すかし、おだて、とありったけの手をつくしていた。

こうした状態で二回ほどすぎると、親も子も次第におちついてきた。子どもは一つのおもちゃで治療者とある程度あそべるようになり、母親も子どもがおちついてくるとへやの片すみでみていられるようになってきた。

そのころ子どもがしたあそびは、子どもが汽車をもって走らせながら、ボーッ……行き！」とどなると治療者がふみ切りを下げて通過させ、終るとあげて治療者が自動車を通す、という単純きわまるものであった。

こうして数回すぎたあと、母親が途中から「別のへやで先生とお話しているから」といって外へ出たが子どもは平気であった。それで大丈夫と思ってその次の回に、はじめからはなそうとしたところ、あばれはじめて前述の万年筆のさわぎなどおこしたのである。この日は、あとできくと、その前回ひとりであそんだので、ひとりになることには不安はなかったのであるが、それを母親にみせたいとくる途中で母親に話していたのだそうである。それがうら切られたのでさわぎ出したのであるが、こういう気持になったときにはちゅうちょなく離さねばならないともいえる。

そう考えたので、その次の日には、多少のことは予想して離す予定をたてていた。

その日のことは、少しくわしくのべた方がよいと思われるので、次回にしるすことにしたい。

（国立精神衛生研究所）